

〔翻 訳〕

## 『閑 中 録』(二)

作 恵 慶 宮 洪 氏

翻訳 梅 山 秀 幸

壬午の年(1762)の禍変というのはいまだかつてなかった変事であって、先王<sup>1)</sup>が丙申の年(1776)の初めに英廟<sup>2)</sup>に上疏して、

「承政院日記<sup>3)</sup>をなかつたものにいたします」

とおっしゃって、その記録を削除することになったが、それは先王の父親への孝心から、当時のことが衆人の眼に触れないものでもなく、その無礼であることを悲しまれたのであった。それから時が流れ、事蹟を知る者がなくなり、そのあいだに利を貪って、禍を好む者たちが事実をねじまげて、輿論を眩惑させようと考え、あるいは、

「景慕宮はご病気ではいらっしゃらなかったが、英祖は讒言をお聞きになって、あのような処分をなさったのだ」

といたり、あるいは、

「英祖としては思いもおかけにならなかったことを、臣下たちが勧めて、あのように無惨なことが出来たのだ」

といたりした。

先王は英明でいらっしゃったから、その当時はたとえ幼かったとしても、すべてみずから直接にご覧になったことで、たばかられなさったお父上のために、どうしてもそのままに放っておくことができようかと考えて、景慕宮に属するその年のことがらを一例として、その是非と真偽を明らかにしないのはご自身にとっての痛恨事であったので、やむにやまれずに削除なさったのであった。先王はすべてご存じの上で、情義に引かれてそうなさったのだが、後王<sup>4)</sup>は先王とは立場が異なっていたらっしゃる。しかし、どのような大事であっても、子孫であるのに知らないというのでは、人情と天理におおいに背くというもの。主上があまりに若くていらっ

しゃったから、このことを知ろうとなさっても、先王がそれほどくわしくはお話しにならなかったが、しかし、ほかのだれがあえてこのことに触れ、事実についてつぶさに語るができるであろうか。わたくしがやがていなくなれば、宮中には知る人がだれひとりいなくなって、いっさいがわからなくなり、子孫として祖先の大事についてなにひとつ知らないようではわびしくもあり、一度、その前後のことを記録して、主上にご覧にいらしてから、死んでいこうと思って、筆を執ってはみたものの、なにごとくも書かないままに、その日その日が過ぎていった。わたくしはたびかさなる惨禍の後、生命は糸のようで、ほとんど切れたようであったが、そのことが主上には知れないようにしていた。しかし、死はまことに人情の外のこと、苦しみに耐え、泣血を流しながら、このように記録してみたものの、あまり書いていない節々は多く省略したところで、また枝葉についてはあえて取り入れることをしなかった。わたくしは英廟には息子の嫁として常日ごろともかわいがっていただいたし、死地からよみがえるような恩をも蒙っており、また妻として夫の景慕宮のためのまごころは天をも貫くものであるから、この父と子のおふたりのあいだでひとことのことばでもあやまれば、天罰を免れまい。

他の人たちがあの年のことをあだこうだといっているのは、すべてが孟浪無稽の説というべきで、このわたくしの書き記したものを見れば、あの年のことの始終がはっきりとわかるだろう。

英廟は、その始めにおいては、たとえ慈愛のお気持ちをもっていらっしゃらなかったにしても、後にはなにも事をお加えになることはなかったし、景慕宮も生れつき仁厚かつ寛大な性格でいらっしゃり、ご立派であったものの、ご病気がはなはだ重くなって、宗社の存亡の危機が迫るような事態になってしまったのだ。そこで、わたくしは先王とともに、景慕宮の妻子として無惨な禍変をやり過ぎて、死ぬことなく生きながらえはしたものの、哀しみがおのずとあふれ、その一方では、この世の義理というものもおのずとわきまえるようになって、今日を迎えたので、この点を主上はくれぐれもご理解いただきたいものだ。

おおよそ、この事件に関しては、英廟を恨んで、景慕宮はご病気でなく、臣下に罪があったとするのでは、ただ事件の実相を見失うだけではなく、英祖、正祖、純祖の三代の王さまにとってもお気の毒で、このことを推量するだけでも、この義理というものを理解するのになにがむずかしかるうか。わたくしは壬戌の年(1802)の春に壬午の禍変のことを書き記しておいて、まだ読み返す機会がなかつ

たが、最近経験した新たな事件<sup>5)</sup>についても、嘉順宮<sup>6)</sup>もご子孫に伝えてわからせるようにすることが正しいと思うので、書き記して伝えることにした。たとえ書き終えることができなくても、主上がご覧になって、わたくしの心血がみなこの記録にあるのを理解されよう。それにつけても、書き記すうちに、あらためて心魂がおののき、肝肺が破れそうで、一字を書くごとに涙を一滴落として、ちゃんと書くこともできない。この世間にわたくしのような人間がいったいどこにしようか。

戊申の年(1728)の後というもの<sup>7)</sup>、国の根本である世子が長く空いたままであり、英廟は昼夜となく憂慮なされたが、乙卯の年(1735)の正月に宣禧宮が景慕宮を誕生なされたので、英廟におかれても、仁元、貞聖の両聖母とごいっしょに宗社の莫大なる慶事であるとして、お喜びになった。そのお喜びのご様子はくらべるもののないほどで、一国の臣民もまた喜んで、手で舞い、足を踏み鳴らさなかつたものがだれかひとりでもいたであらうか。

景慕宮はお生れになって、その氣質が岐嶷として非凡であることは格別でいらっしやう。宮中で記録して伝えているところによると、お生れになって百日もたたないうちに、すでにして奇異なことが多くおありであった。四か月でお歩きになり、六か月で英廟がお呼びになるのにお答えになり、七か月では東西南北をおわきまえになった。二歳になると文字を学んで六十余字を書くことができ、三歳のときにお菓子をさしあげると、「寿」と「福」の文字の刻まれているものを召し上がり、八卦の刻まれたものを別にとっておいて、お召し上がりにならなかつた。お仕えしている者が、

「お召し上がりください」

と申し上げると、

「八卦に食べるなど出ている。いやだ」

とおっしゃって、召し上がらなかつた。

その後、太昊伏羲氏<sup>8)</sup>が書いた本を高くさしあげて、お辞儀をし、千字を学ばれたが、奢侈の「侈」の字と富裕であることの「富」の字に至ると、その意味を示すために着ていた服をさして、これが奢侈であるとおっしゃった。また英廟が幼いときに使われていた冠に七宝で飾られたものがあって、それをお用いになるようにといわれていたのだが、これも奢侈であるとして、用いられず、誕生日に新しい服をお召しになることになったが、

「奢侈で、人の見る目が恥かしくて、いやだ」

とおっしゃって、これもお召しにならなかった。

三歳のとき、おかしなことがあって、お付きの者がために、明絢と木綿の反物を置いて、

「どちらが奢侈で、どちらが奢侈ではないのでしょうか」

とお尋ねしたところ、

「明絢は奢侈で、木綿は奢侈ではない」

とおっしゃった。また、そのご様子をうかがいながら、

「どちらでお着物を作ってお召しになるのを好みでしょう」

とお尋ねしたところ、木綿を選んで、

「こちらが好きだ」

とおっしゃった。このことからいっても、その資質の卓越なさっていたことが理解できようというもの。

景慕宮の容姿は雄壮かつ碩大でいらっしゃり、生まれつき孝友かつ聡明なご性格で、もしもお父さまとお母さまのおそばを離れることなく、すべてについて教え導かれ、ご両親の慈愛と躰を並行してお受けになっていれば、そのすぐれた人格の完成することがいかばかりであったろうか。ところが、そうはならず、早い時期にご両親とは遠くお離れになったことで、因縁がからまりあって、小事が大事となり、畢竟ずるに、最悪の事態にまで至ったのは、天数の不幸、国家の悲運というべきであって、人力ではいかんともしがたく、わたくしの怨み、悲しみは、今もっていかばかりであることか。

英廟は東宮の地位が長く空いているのを心配していらっしゃったから、ようやくお世継を得て、たいへんお喜びになったが、国王として、わが子を手元において遠ざげたくないという私情などさしはさむことなく、はやく東宮の建物の主人におなりになることだけを、頑固にお考えになった。そこで、急に法をお整えになり、お生まれになって百日にもならないのに、誕生なさった集福軒<sup>9)</sup>から離して、乳母だけに養育を任せて、長く空いていた儲承殿<sup>10)</sup>という大きな殿閣にお移しすることにした。儲承殿というのはもともと東宮のいらっしゃる御殿で、その横には学問をなさる楽善堂、召対<sup>11)</sup>をなさる徳成閣、そして東宮が祝賀をお受けになり、会講<sup>12)</sup>なさる時敏堂などがあって、さらには、門の外に春坊<sup>13)</sup>と桂坊<sup>14)</sup>とがあり、成長なさればすべてが東宮に所属するものであったが、すでに大人であるかのように、儲承殿の主人になされたのは、まことに王の深い思召しからであったろう。

英廟のいらっしゃる所と宣禧宮のいらっしゃる所とはたがいに遠く離れていたの  
で、お二方は極寒と盛暑をお避けになることもなく、毎日のように東宮のもとに  
やって来ては、おとどまりになることも多かったが、それであっても、親子が一つ  
家の中において、朝夕に養育して、休むことなく教訓するのと、どうして同じであっ  
たろう。いったいどのようにお考えだったのか、貴重な宗社をお預けになるご子息  
をようやくのことで手に入れたというのに、規則は二の次にしてでも、父母の手元  
に置いてお育てして、その成長をご覧になればよかったものを。居所も遠く離れて  
いて、ものごころついて、おのずと遠くにいらっしゃることが多く、会われる機  
会が少なく、朝夕に対しなさるの、宦官とか宮妾とかいった人たちばかり、お  
耳になさることといえば、巷のつまらない世間話しであったから、これがすでに変  
事の発端であったといえよう。それをどうして悔しく、恨めしく思わないでいられ  
ようか。

景慕宮は幼いころからすでに徳が不思議なほどに備わっており、行動には筋道が  
立っていて、常理があり、気性も厳かで、ものしずかでありかつたから、仰ぎ  
見るものはすでに大人の王さまに対するのと変わらないように感じたものであ  
った。そうした天稟と資質でもって父母のお側を離れずに、父王が万機をつかさど  
る暇にでも文章を読み、事を学ぶことをみずからお教えになっていたならば、そ  
して、母嬪にしてもこの子の成長だけが最大の気掛かりのはずで、手中からはな  
さず、そのことそのことと指示をして、一方では厳しく、一方ではやさしくな  
さず、その間がしっくりといてすき間がないようになさってさえたならば、ど  
うしてこのような事態に立ち至ることになったであらうか。事のはじめにひどく悔  
まれることは、一つは幼い子どもを儲承殿に引き離して置かれたこと、二つはおか  
しな内人たちをお側に置かれたことであった。おんな子どもの無駄口めこうが、事  
の起りをおおまかにでも記しておこう。

儲承殿というのは魚大妃<sup>15)</sup>のいらっしゃった建物で、いらっしゃらなくなっ  
てさほど月日がたっていなかった。儲承殿の向こうの就善堂という建物は張禧嬪<sup>16)</sup>  
が甲戌の年(1694)の後に住んで、仁顯王后<sup>17)</sup>を呪詛した所でもあった。襤褸の赤  
子をそうした荒涼たる殿閣にひとり置いた上に、おぞましくも、張禧嬪の居所を台  
所として、食事を召し上がることにしたが、それがどうして異常なことといえな  
いであらうか。魚大妃が亡くなって三年の後、魚大妃に仕えた内人たちは里に下  
がって行ったが、東宮を設けるからには、体面というものがある、各部局の内人

を集めるのが当然であったから、どのように思われてのことであったか、王さまは、景祖と魚大妃に仕えて今は下がっていた者たちを崔尚宮以下ふたたび呼び戻し、東宮の内人にお決めになった。各部局の内人たちの様子は景宗のいらっしゃったときのままで、負けん気が強く、人情が遅れていることといったら、おはなしにならないくらいであった。ほんの小さなことをきっかけにして事が生じたりもしたので、どうしてそれを悔まないでいられよう。

英廟には、御子を授かって、その愛情はなみなみではなく、四、五歳のころまでは儲承殿にいらっしゃると、いっしょにおやすみになったりして、かわいがられるさまにはいささかのすき間もなかった。景慕宮におかれても性質として孝行であったのみでなく、ごく自然な天理、人情としても、幼時どうして父母を愛さないということがありえたらうか。たとえそれぞれ居所が遠くに離れていても、このようにかわいがって、教訓をあたえ、普通の家の父子のように過ごされていけば、おふたりのあいだにどうしてわずかでもすき間が生じたであらうか。ところが、国家の運命がそのようになっていたのか、形容しようのない、またこれといって指摘することのできない微細なことに対して、王さまがお心の中で激怒なすることがあったようだ。なにもおっしゃらないので、一日、二日とどうしたものかわからなかったが、それから、東宮にお泊りになることがしだいに少なくなっていく。その御子がまさに育とうというときに、ほかの子どものように父親がいっしょにいて教えず、また、いけないことを禁じず、変わりやすいときに、自然とお会いになる機会が少なくなって、どうして変事が生じないでいようか。

英廟は和平翁主<sup>18)</sup>をことのほかにおかわいがりになった。戊午の年(1738)に錦城尉<sup>19)</sup>に目合わせることにして、婚礼をあげさせ、前の東宮の居所で遊ぶようにおさせになったが、その花婿をおかわいがりになるさまは翁主とともにまた格別であった。

東宮の内人たちはすべて景廟の内人であった人たちで、乳母の崔尚宮は雑念がなく、意志が強く、忠誠心もあったが、性質が過激かつ険しくて、寛容な人物ではなかった。またその次の韓尚宮は知恵に富んではいても、企みが多く、よこしまなところの多い人物であったから、たとえ東宮の内人になったところで、もともと景廟の内人であってみれば、英廟に対してどうしてまったく忠義の気持ちをもちえたらうか。

こうした、もろもろの内人たちが大義というものを知らず、宣禧宮が東宮を誕生

なさって、きわめて尊貴なご身分におなりになったことを考えもしないで、まだ重くはなかつたご身分のころのことを思ってあなどったりもし、ことばも丁寧ではなく、あるいは中傷もしたりしたので、宣禧宮は心中安からずお思いになったが、そうした事情を英祖はどうしてうすうすにご存じないということがあったろうか。年の始めに經典を読む日、錦城尉もやって来て、たまたま遅くなって、読経する準備が遅れたが、そのときいた内人たちがもともと恭順ではない者たちで、かんしゃくを起こし、たがいに中傷しながら、座ってなにごと落ち着きがなかった。宣禧宮がお怒りになって、英廟もその怒りにお気づきになり、けしからぬとはお思いになったが、かわいがっている錦城尉がいる席で罪を与えたりすれば、翁主とその花婿に恨みが及ぶことになるのではないかと考えて、処分はなさらなかった。お心の中では不愉快にお思いになって、それからは、東宮にいらっしゃろうとしても、その内人たちの顔を見るのもいやで、東宮にいらっしゃることが少なくなってしまった。その内人たちを追い出してしまえば、事なきをえたらうに、かえって、景慕宮をその困った内人たちの手元に置いてしまうことになってしまい、その内人たちにまかせたつきり、東宮にはまれにしかお出かけにならなかった。それがどうして困ったことでなかつたろうか。

そのようなしだいで、東宮は成長なさって、遊びたい気持ちがお盛んになったのも、子どもというものの常であつたろう。今しも学ばれる時間に、王さまがまれにいらっしゃったすきに乗じて、韓尚宮が崔尚宮に、

「だれもかれもお諫めして、反対すれば、子どもの心というものは鬱積して、のびのびすることができないものです。崔尚宮は厳しく後見して、正しい道理をもってお導きすることとして、このわたくしは、お遊び相手にでもなって、のんびりなさるようにしましょう」

といった。この者は小手先が器用なので、木と紙とで偃月刀も作り、弓矢も作って、崔と自分が交代してお仕えすることになっていたが、崔尚宮がご前を下がると、内人たちの幼い子どもたちを門の後に集めて立たせておいて、その子どもたちにおもちゃの武器をもたせて、おたけびをあげて、駆け入らせ、東宮といっしょに遊ばせた。たとえ聖人の資質があつたとしても、孟母三遷の故事というものもある。どうして東宮のお心を惑わせなかつたといえようか。また、どうして子どもに遊びたいという誘惑に勝つことができるものだろう。東宮は遊びを貪りつつも、父王がいらっしゃってご覧になれば、お怒りにならないかと心配なさる。子どもの

心というものゝは父親と母親を見る心には違ひがあるものだが、母嬪もご存じにならぬかと心配して、お母さまづきの内人がやつて来てても忌避なさるやうなお気持ちが生じたのであつた。學問をなさるべきときに、あるうことか、そうした不吉な武器で遊ばせて、もともと英雄の氣性をもつておられたから、そうした遊びをはなはだ好まれたが、その遊びによつて、しだいに取り返しつかぬ事態に立ち至つたわけで、その韓尚宮の立ち働きはいかにもまがまがしくて、無慘なことであつた。

そのようにして、三、四年がすぎ、七歳におなりの辛酉の年(1741)、英廟は韓氏の心のよこしまなことをお悟りになつて、引きさがらせ、ほかの内人も罪せられた者が多くいたが、その処分は至極当然のものだつたといえよう。そのとき、東宮の内人をみな追ひ出し、厳しく懲戒し、ご両親が離れることなく、お側に置いて、お教えになつていれば、景慕宮も孝心にもとることもなかつたらう。ところが、その内人だけを追ひ出し、他の内人はみな置いて、その者たちがうやうやしくはれものように扱つて、子どもたちを広い建物に置いて、大人たちが見守ることもなかつたから、景慕宮は氣ままに育つて、ご覧になる大人といへば、宮人と宦官だけで、いっさいなにを學べるというのであろうか。

このようにして、大殿と東宮とのあいだは形容のしようのないほどのものになつて、あれこれと口をさしはさむ者もいなくなつて、子どもには親を恐れる心が生じ、また親には子どもがどのように育つてゐるかかわからず、あるいは自分の気持ちに背くのではないかとお考へになるようになった。父子とはいへ、性格が異なつてゐて、英廟は英明かつ仁孝であつて、細かなことまで気づき、敏達な性格でいらつしやつたが、景慕宮はことばが少ないうえ、行動にすばやさがなく、敏捷さに欠けていらつしやつた。徳器は十分に備わつていらつしやつたものの、すべてにおいて父王とは性質が異なつてゐて、ふだんお尋ねになつたことに対しても、すぐにはお答へになれず、もじもじとしてやつとのことでお答へになるのであつた。それは、なにかを尋ねられて、みづからの所見というものがないわけではなくて、こう答へればどうなり、ああ答へればどうなるなどと考へ過ぎて、すぐには答へることがおできにならなかつたのだが、それをいつも英廟はうつとうしくお思ひになつて、このことがまた事の発端になつたのであつた。

たいがい子どもの教育というものゝは、たとえ尊いご身分であつても、自身の父母にはうやうやしく仕えて、教へをうかがい、父母に心配をかけないやう、誤りを犯さないやう、心がけるものだが、ここではそうではなく、襁褓のときからご父母を



お離れになって、内人たちのもどわがままのしほうだい、はなはだしくはチョゴリの結び紐を結ぶことまでみな人にさせて、ことごとくに人にお任せになった。講義の場で学者たちにお会いになる際には、おごそかで肅々として、講義の声もよく通って、解釈もとどこおることがなかったの、拝聞する者たちが素晴らしいとほめたたえ、宮廷の外にもその令名が広がった。ところが、一方、鬱々として、気がすまぬのか、父王にお目見えするときには、恐ろしくなって、応対が敏捷にはできない。そのうえ、英廟は一度いらいらなさると、二度いらいらなさり、さらには激怒なさって、きびしく注意もなさるしまつ。近くに置いて、みずからお教えになったなら、情愛にもすき間がなくなろうという道理もお考えにならず、いつも遠くに離れたままで、景慕宮が自然によくなって、お心にもかなうようになれるのをお待ちになったが、そのようなことでどうして変事が生じないわけがあったらう。

父子のあいだでしだいに食い違いが生じて、たがいにお会いになるときには、父王は過ちを責めることが愛情に先立つようになり、お子さまの方は一度お会いになるということだけでもひどくお気を遣って、まるでなにか一大事を控えていらっしやるようで、無言のうちにも、父子のあいだの葛藤が深刻になっていったのを、どうして哀しまないでいられようか。

景慕宮が丙辰の年(1736)の三月に東宮に冊封され、七歳の辛酉の年(1741)には書筵<sup>20)</sup>をなさり、八歳の壬戌の年(1742)の正月には宗廟にお参りになって、三月には入学なさったが、その神々しいほどの資質を感嘆しない者はなかった。癸亥の年(1743)に冠礼<sup>21)</sup>が行われ、甲子の年(1744)の正月には婚礼が執り行われた。わたくしが入っていき、宮廷内の様子をうかがうと、当時は三殿<sup>22)</sup>がいらっしやり、宮中のしきたりがおごそかで、礼が重くて、髪先のほどにも私情がさしはさまれなかったから、畏まった気持ちで注意をはらい、あえて一時たりとも気をやすめることがなかった。景慕宮も父王に対して親愛の情はさしおいて、警戒する気持ちが先だっけいらっしやったから、十歳の子どもにして、あえて向かい合って座ることなく、おおぜいの臣下たちと同じように平伏して仰ぎ見るような、過ぎたことまでなさったのであった。髪を梳いて、顔を洗うのをはやくすませることがなく、いつも講書の時間になると、だだをこねるようなことをなさる。ごあいさつにうかがう際には、わたくしははやく手洗いをすませて、大曲げを結び、服を着て、すぐにでも出かけようとするのだが、宮嬪が先に立って行くという法はない。いつ

も待たされて、子ども心にどうして手洗いにそのように手間取るのか不思議に思い、なにかご病気ではないかとも思ったが、はたして乙丑の年（1745）のころから、景慕宮は子どもとしてはいたずらが過ぎるようになり、遊びに普通とは違う様子がまじって、お心を病んでいらっしやご様子であったから、内人たちが集まってひそかにかたらい、心配し、気づかっていたようであったが、その年の九月には病状がはっきりと現われて、進退が常ではなくなったので、占いをすることになった。

はたして巫卜のいうことはすべて同じであった。すなわち、儲承殿にお住みになっていることが禍のもとで、財物を費やして、神を祭り、祈禱して、経を読むようなことを多くしたものの、快方には向かわれず、儲承殿を離れて、大造殿<sup>23)</sup>の翼室の隆慶殿に避寓なさせて、わたくしは集福軒に行ってお仕えして過ごすことになった。そのようにして、丙寅の年（1746）の正月には景春殿<sup>24)</sup>にわたくしまで移ることになったが、そのとき十二歳におなりであった。景春殿というのは延慶堂と集福軒が近く、宣禧宮もしばしばお足を運ばれ、和平翁主はその性格が仁厚かつ恭儉といった方であったが、そのお兄さまを尊んで、

「延慶堂に参りましょう」

とおっしゃっては、こちらで親しくお過ごしになった。

英廟がその翁主をおかわいがりになったことは特別で、なにごとにも寛大に目を細めてご覧になっていたほどであったから、たとえ景慕宮が父王を恐れることが生じて、和平翁主が長生きさえしていらっしやったなら、殿宮のあいだを取り持つて、有益なることがいかにばかりであったろうか。

丁卯の年（1747）には、景慕宮は書篋も着実に行って、心配ごともなく過ごしていたが、十月になって、昌徳宮の行閣<sup>25)</sup>の火災があって、王さまは慶熙宮<sup>26)</sup>にお移りになり、景慕宮の居所は緝熙堂、宣禧宮は養徳堂、和平翁主は逸寧軒にそれぞれ住まわれることになって、あいだが遠く、あい見ること少なくなって、そのときから、景慕宮の乱行がさかんになった。

戊辰の年（1748）の六月に和平翁主が亡くなって、英祖は天倫のほか特別にかわいがられた娘を失って、お哀しみになり、ご自身のお身体を損じるほどであった。宣禧宮のお哀しみになるご様子もまた同様であって、お二方の子に先立たれた哀しみは万事夢のごとくであって、その間、ご子息の方は振り返りもなさらなかった。ご子息はといえば、その間、だれにもはばかりもなく、遊戯にもふけり、

世間の万事に手を染めなさらぬものとして、弓を射、刀をふるい、技芸の類をみなよくなさり、お遊びになることに余念がなかった。絵を描いて日を過ごし、經文雜書を好んで、堂主の卜者<sup>27)</sup>の金明基に經を書いて来させて学んで、暗記なさったりしたが、そうした雜事には氣をお止めになったものの、どうしてそれが學問として穩当なものであったといえようか。

こうしてみても、ご両親が近くにさえいらっしゃれば、學問にもはげみ、父子の間にすき間風が吹くことはなく、ひたすら遊戯に耽るということもなかったのだが、遠く離れてしまつてからは、ふたたび遊びほうけ、講學にも熱心ではなく、父子の間の齟齬がはなはだしくなつていった。ご父母の手の外に出て行かれさえしなければ、このような事態に立ち至ることもなかったのだ。この一つだけでも、たいへん残念なことであつたが、どのようなお考えでのごことであつたか、そのご子息を、雜事から離れてお暇なときにも、間近に座らせて、真情からお諭しになるということも、はたしてなかつた。すべて他人に任せっきりで、狀況を知ろうという素振りすらなさらず、人が集まる機会があるたびにいつも誹るようなことだけをおっしゃつたのだから、どれほどお氣の毒なことであつたらう。

あるとき、王さまが病氣にかかれ、仁元王后もお見舞いに參られ、他の翁主の方々と月城、錦城の二人の花婿もやつて來られて、多くの人が集まつたときに、内人に命じて、

「世子をからかつて、遊んでみよう」

とおっしゃつて、みなの前で恥をかかせるようなことをなされた。講學の場や、次対<sup>28)</sup>の場においても、多くの臣下のいるところに是非とも呼んで文章の解釈を尋ねて、子どもの身でくわしく答えられるわけのない一節であっても、酷薄に質問なされた。もともと父王の前では、はっきりご存じであってももじもじなさるたちであつたのに、大勢の前でわざわざむずかしいことをお尋ねになつたから、景慕宮はいっそう萎縮してお答えになれず、それをまた人びとの前で叱りつけ、誹るようなことをなされたのだつた。景慕宮はそんなことが二度、三度と重なつても、あえて父王をお恨みになるようなことはなかつたが、ご自分を真情から教訓なさりもせず、かえつてそのことに激し、お怒りになつたことが恐ろしくて、おふたりのあいだには深い溝が生じて、とどのつまりは、天性を失うに至つたのだが、こうした痛恨事がいっただいどこにあるか。

和平翁主が存命のころには、お兄さまの味方をして、王さまをお諫めしたり、仲

を取り持たれたりして、有益なことが多かったが、その翁主の亡くなった後は、王さまは度を過ぎられることがあり、お叱りになっても、慈愛というものが足りず、だれか前に出て、

「そのようにおっしゃらずとも」

と申し上げる人もいなくなった。王さまにはしだいに愛情もなくなる一方で、東宮は恐れる気持ちだけが日に日に強くなって行き、子としての道理もようやく失うようになって行かれた。和平翁主が存命ならば、父子のあいだに慈愛と孝心というものが通じ合っていたはずだが、善良な翁主の夭折なされたことが、どうして国運に関係しなかったであろうか。今思い返しても、まことに痛憤の極みである。

景慕宮は生まれつき心が寛く、度量も大きくていらっしゃって、人に対して信義を重んじ、下の人をも信じて話しかけられた。父王を恐れるあまり、ご自分に都合のよくないことであっても、尋ねられれば、ありのままに報告して、髪の毛先ほども包み隠すということをなさらなかったから、英廟も隠し事がないということだけはご存じであった。

和平翁主は孝誠の思いのこもったことばを上に対して尽くされ、友愛の情も特別におありであり、父王のご慈愛を特別にお受けになっていたから、わが身を尊く思うのが自然であるのに、決してその勢いを頼むようなことをなさらず、真情として親愛のお気持ちにあふれておられた。和順翁主が母親がなく過ごされていることを気の毒にお思いになって、長姉として敬われた。和協翁主は癸丑の年（1733）にお生まれになったとき、英廟はまた女子であることに気落ちなさったまま、その翁主の容貌が優れていて、孝行のお気持ちもひとかたならず、すばらしい方であったにもかかわらず、愛情をお注ぎになることがなかった。そのとき、男子でないことを知って落胆なされて、和平翁主とほかの兄弟姉妹がいっしょに一つ屋根の下に住むことのないようになされたので、和平翁主だけがひとり王様の愛をお受けになることになって、心中に穏やかではなく、

「それでは困ります」

と申し上げたところで、聞かれず、なすすべもなかった。和協翁主との因縁から、英廟はその花婿の永城尉も愛されなかったので、景慕宮はその妹が年もおたがいに若く、父王に愛されていないという境遇も似ていることから、いつも気の毒に思っ

て、親しくおつきあいになった。

己巳の年（1749）、景慕宮は十五歳におなりになった。冠礼<sup>29</sup>）を正月二十二日に

行い、二十七日には合礼<sup>30)</sup>を行うことが決まったが、ようやくと嫁を迎え、十五歳になって女子と同衾することを喜ばれて、そのことにひそかに興味を見出され、お楽しみになるところであったのに、どうしたお心からか、突然に王さまの摂政をなさるように命令があった。その日というのが、ちょうどわたくしの冠礼の日であったが、億万の事がその摂政を引き受けたことによって生じることになったのだから、どうして悲しまないでいられようか。

英廟はご両親に孝を尽くし、ご先祖を尊び、天を敬って、民をお愛しになった。その徳の盛んなこととまごころとは千古の帝王に抜きん出ているらっしゃって、わたくしの耳目に入ったところと記録に残されたところを考え合わせて見ても、歴代に比較しうる王さまがいないほどであった。ただ、辛丑の年(1721)から壬寅の年(1722)にかけての王位継承のごたごたを経られ<sup>31)</sup>、また戊申の年(1728)の逆変<sup>32)</sup>を経験なさったから、それにこりて忌みはばかれることがおおく、用心なことがほとんど病的なほどであったが、その間の事細かなことをどうしてみな記録することができよう。ことばを選びに選んで、「死」という字、「帰」という字を忌んで、朝議の時であっても、その字を目にすれば、外に出て、お召しになっていた服を着替えた後にふたたび入って来られるありさまであった。不吉なことばを口に出したり、耳にしたりして、やって来られるときには、歯磨きをして、また耳を洗った後に、まず人を呼んでひとことでも縁起のいいことばを聞いて、やっとのことでお入りになった。そして、縁起のよいことをなさるときと悪いことをなさるときとは出入りなさる門を変え、愛する人の家に愛さない人がいないようにさせ、愛する人の往き来する道を愛さない人が往き来しないようにおさせになった。このように、極端なほど愛憎がはっきりして、そのお心のうちを付度することのできないほどであった。

摂政をなさる前であっても、死刑囚の審理やりなおし、刑曹に関する裁判、そして重罰者の審議など、王さまのいわゆる不吉なことに関してはしばしば世子にお任せになった。和平翁主と戊午の年(1738)生まれの和緩翁主、すなわち今の鄭氏の夫人になっておられる方のお部屋に行かれるときは、引見のお着物を着替えた後に行かれたが、景慕宮にはそのようなことをなさらずに、外殿において政事をなさって、お入りになるとき、政事をなさった衣服を着たままで、通路で呼びつけて

「お食事を召し上がったか」

と尋ねて、そのお返事を聞かれた後で、耳をその場でお洗いになって、お洗いに

なった水は、宮中はあのように広いのに、わざわざ和協翁主のいらっしゃる建物の  
明り窓のところに捨てさせなされた。いったいどのように尊いお嬢さまだからと  
いって、会うために外でお召しになった着物を着替えるというようなことまでなさ  
り、また身分の決して軽くはないご子息がおっしゃったことばを聞いた後に、汚れ  
たからといってその耳を洗ったりなさるなどということがあって、いいものだろう  
か。景慕宮は和協翁主に対して、

「われわれ兄妹は汚れていて、お洗いになるわけだ」

とおっしゃって、たがいに苦笑いなされた。

和平翁主ご自身はまごころをもってわが身を平安に処して、申し上げることに對  
して真剣に耳を傾けて、いささかも疑ったり、忌み嫌ったりなどなさらず、一様に  
親愛の情をかけ、たいせつに思っていられしやることを宮中で知らない者はなく、  
みなが感嘆していた。宣禧宮は王さまの慈愛の均等でないのを悲しんでいられ  
しやったが、どうすることもできなかった。

いつも、公事の中でも義禁府や刑曹や、それから殺人にかかわるようなことに關  
しては、英廟みずからご覧になることはなく、後宮の翁主たちの居処にいられしや  
るときには、宦官に任せることにして、また、景慕宮に代理をおさせになった。戊  
辰の年（1748）に和平翁主の亡くなって後はお悲しみもはなはだしく、ご病氣もし  
ばしばで、静養なさるといふ口実で、景慕宮に摂政として政治を執り行うようにお  
させになったのだった。しかし、実をいえば、事柄を選び分けて、後宮に持ち込み  
たくない公事は内官に任せ、おぞましいことはみな東宮に任せようというお心で  
あった。代理なさるようになってからは、公事は、内官をひきつけてなされ、ひと  
月に六度ある閣議は、十五日以前の三度は大朝<sup>33)</sup>でなされて、景慕宮もお側にい  
られしやることになり、十五日以後の三度は小朝<sup>34)</sup>でひとりで行われることと  
なった。そうなった当初は事ごとに順調に行くはずがなく、随所に事故が生じた。  
おおよそ、朝臣たちの上書であっても、言い分に偏ったところのある上書は、小朝  
でひとりで決することをせず、大朝に上奏なされたが、その上書が地下の人々の取  
るに足りない事柄に過ぎないのに、小朝ではなぜ決定できないのかと激怒なされ、  
さらには、小朝では臣下たちをよく調和させないためにそうした上書が出てくるの  
だとして叱責なされた。その上、そのような上書に対していちいち大朝に相談なさ  
るのを責めて、

「その程度のことを決断することもできずに、わたしを煩わせるようでは、摂政

をさせる甲斐がない」

とおっしゃって、お叱りになった。ところが、上奏しなければ、しないで、

「そのようなことを、わたしに相談もしないで、決めるとは」

と、お叱りになるのだった。こうしたことを、ああしなないと叱り、ああしたことを、こうしなないと叱り、このこと、あのこと、すべてに激怒なさって、お気に召さないようであった。そのうえ、凍餓や日照りなどの天変や災異があれば、

「小朝に徳がないので、このようなことが起こるのだ」

と、お叱りになった。そのため、小朝では空が曇ったり、冬に雷があつたりすれば、またお叱りになることがあるかと心配して、気掛かりで、事ごとに恐れ畏まっていたので、とうとう邪思妄念までが浮かんで来て、ご病気の兆候がしだいに顕著に現われるようになった。

英廟は盛んな徳をもち、仁にも富んでいらっしゃって、そのうえ、英邁かつ聡明で、決してうっかりなさるようなご性格ではなかったのに、この万金にも代えがたい東宮にご病気が現われたことがおわかりにならなかった。どうして恨めしく思わないでいられよう。東宮は王さまの一度のお叱りにおどろいて、二度の激怒にすっかりおびえて萎縮してしまわれる。どれほど雄偉で、英壯な気質であつたとしても、一つの事として自由になさることはできなかつたのだった。たとえば、庭試<sup>35)</sup>だとか、謁聖文科<sup>36)</sup>だとか、試射<sup>37)</sup>だとか、あるいは観武才<sup>38)</sup>だとかの、はなやかな行事をご見物になるときはお呼びにならず、十一、二月の啓覆<sup>39)</sup>の場にはお座らせになるのだから、どうして心に病んで、鬱屈しないでいられたらう。たとえ父親が過つたとしても、息子が次々と孝行を行って、息子があるいは親に刃向かつて、父親がますます恩愛を与えてさえいけば、それはそれでどうなつたところで、天意であつて、国運も人力ではいかんともしがたいこととあきらめもつこうけれど、わたくしは成り行きを目にして、今になつても苦痛が胸にせまつて、どうしてそのまま書き付けることができようか。そのときのことを書こうとして、英廟と景慕宮のあいだにあつたことが、上下に徳が不足したことがはっきりと現われた罪のようで、実情を書こうとしながらも、紙に向かつて胸がふさがるばかりである。

景慕宮は十五歳になつても、陵幸<sup>40)</sup>に一度として随行したことがなく、もう大人になつたのだから、郊外の見物をいささかなりともしたいものだと思つても、いつもソウル内で動かれるのみであつた。陵幸の際に礼曹から東宮の随行のことが奏

上されれば、あるいは随行できるかと考えて、退屈で居眠りしていらっしやったが<sup>41)</sup>、いつもお行きになれないことになってしまうのだった。最初はもの足りずかき口説くようにしていらっしやったが、しだいに星火ようになって、お泣きになることもあった。ご自身はご父母に対して心の中ではまごころをもっていらっしやったのだが、敏捷ではいらっしやらないために、おもちのまごころの百分の一もお目にかけることもできず、父王はそのことをご存じなく、不審のご様子をいつもご表情にもおことばにも現わされ、一度として仮借なさるということがなかった。そのため、しだいに恐れおののくことが募って、発作が生じれば、おさまることがなかったので、宦官と内人をよんでおさめさせ、あるいはわたくしまでよばれて、おおさめするようなことが何度あったか知れないほどである。

庚午の年(1750)の八月にわたくしが懿昭を産んだとき、英廟はお心の中でどうしてお喜びにならないことがあったろう。だが、戊辰の年(1748)に和平翁主が難産のすえに、お亡くなりになったことが無惨で、残念なこととして胸にこびりつき、対するに、わたくしが安産ですこやかな男の子を産んだことをお喜びの中にも、翁主が他の者たちのように安産で生きながらえなさらなかったことが新たな悲しみとなって、孫子を得たお喜びを消し去ったかのようであった。したがって、景慕宮に対して、

「おまえはよくぞ男の子を得たものだ」

という一言のお祝いもなかった。そして、それまで、わたくしをかわいがってくださるお気持ちが身にあまるほどで、感激し、感謝しつつも、わたくしひとりだけが慈愛とお褒めにあずかることは不安に思え、いつも気掛かりなほどであったが、出産の後というものは、

「おまえが安産で、男子を得たのはまことに奇特である」

というお祝いのおことばもなかったので、妙齢で男子を出産した喜びを味わうことなく、かえて恐縮したのだった。お心の悲しみが新たになって、お怒りになり、お喜びになるということはなかったのだ。

宣禧宮はそのご息女の和平翁主の死を、もちろんおろそかにお考えではなかったが、わたくしが男子を出産したことをまごころから貴んで、宗社の大きな喜びであるとして、わたくしの出産の後、七日まで産室の近くにとどまって、お世話くださったが、英廟が、

「宣禧宮が翁主のことは忘れ、喜んでいらっしやるのは、人情がお薄いようだ」



とおっしゃって、お心が安らかではないようでしたから、宣禧宮はおなげきになって、王さまのお心が偏屈でいらっしゃることを嘆息なされた。

景慕宮は早熟で、すでに大人のようにいらっしゃったが、ご自身に子どもができて、国家の基礎のいよいよ固まったことをお喜びになった。ところが、父王がすしもお喜びのようではなく、どうということもないご様子なのを悲しんで、

「わたしひとりでもやっかいなのに、子どもまでできてしまって」

とおっしゃって、そのおことばを聞いたわたくしは、ひどく悲しかった。

以下のことを書き立てる理由はこれとってないが、あえて書くとしたら、わたくしが懿昭を妊娠したとき、和平翁主が夢の中にしばしば現われ、わたくしの寢室に入って来て、脇に座って、お泣きになったりすることがあったので、子ども心にもわたくしは不思議なことだと思ったものであった。翁主が出産なさるときには、残忍な産鬼が夢にしばしば現われたそうで、わたくしの身体を心配して現われなさったのだろうが、懿昭が生まれ、湯浴みをするときに見ると、肩に青い痣があり、腹に赤い痣があるのを偶然に発見した。その年の九月十二日に温陽にお出かけになることになって、十一日に、英廟と宣禧宮が一方では悲しみ、一方では喜びといったご様子で、お二方そろっていらっしゃり、突然、眠っている赤子の襟をひっぱって、裸にしてご覧になると、はたして痣があつて、不思議なこととお思いになったようで、それからはおかわいがりになって、和平翁主の弟であるかのように愛された。

子どもを産んだ当初は、王さまは心配してくださるようなこともなかったのに、今では政治を執り行う公服を着たままやって来られて、お気づかいをいっそうなさるようになったが、わたくしはそのことが虚妄だとも、怪異なことだとも、決して思いもしなかった。百日後、ご自身がまつりごとを行っておられた歆慶殿<sup>42)</sup>を修理して、景慕宮が移られるようになさって、あれこれとたいせつに扱われたが、その僥倖というのも子どもの因縁によるもので、その父親に生じたかと祝ったものの、実はその赤子が和平翁主の生まれ変わりだとお思いになってかわいがられただけのこと、その子の父母はその子の因縁によっても決して尊ばれることがなく、その状況は以前とまったく変わったわけではなかったのに、それに気づきもしなかったのだ。

その子がほぼ十か月の、辛未の年(1751)の五月には世孫として冊封なされたが、おかわいがりになるあまりにそうなされたのが、過ぎたことであったのか、壬

申の年（1752）の春にその子が亡くなってしまい、英廟のお嘆きになるさまは、たとえようもなかった。

しかし、天がひそかにあわれみ、祖宗がお助けくださったのか、辛未の年（1751）の師走にはふたたび妊娠して、壬申の年（1752）の九月には男子を産んだが、これがすなわち先王<sup>43</sup>である。わたくしの小さな福の力でこの年にこのような慶事があるというのは思いの外であったが、その生まれ出でた先王といえ、見るからに英偉であり、骨格が秀でて、まことに天から下った真人ともいうべきであった。辛未の年（1751）の十一月に景慕宮がおやすみになり、目をさまされて、

「龍の夢を見たが、尊い子を得るしるしであろう」

とおっしゃって、白い綾絹をもって来させ、その晩、みずから夢に見た龍の絵を描いて、寢室の壁にお掛けになった。聖人の誕生するときには不思議な兆しがあるものである。英廟は懿昭を失って残念に思っていたが、ふたたび国家の礎を得てお喜びになり、わたくしに、

「元孫は尋常ではなく凡俗に秀でていらっしゃるが、これも祖宗の神霊の思し召しであろう。あなたは貞明公主の血を引いて、国家の嬪となられ、この慶事を現わされた。国家にとってまことに多大な功績といえよう」

とおっしゃって、

「この幼な子をぜひよく育て、儉朴にすることが、この福をたいせつにする道理です」

とおっしゃったが、わたくしはそうした王さまのお教えをいただいて、その恩を骨に刻んで、どうして従わないということがあったろうか。

景慕宮は奇喜歡幸といったありさま、そのお喜びはたとえようもないほどで、また、国をあげて臣民たちが祝うさまは庚午の年（1750）に百倍するほどであった。わたくしの実家の父母も喜び祝ってくださることはいかほどであったろうか。お会いするごとに、わたくしが聖子を産んだことを祝ってくださり、わたくしが二十にもならないのに、ふたたび国家の慶事をわが身に受けたことをめでたいこととして喜ばれた上、この身の幸運に頼まれることはいかばかりであったろうか。はるかにお礼をして、きっと孝養を尽くすことを誓うのであった。

その年の十月に紅疫が盛んになって、和協翁主がまずおかかりになり、景慕宮は養正閣に避寓なさって、元孫は樂善堂にお移りになった。誕生なさって三七日に過ぎなかったが、身体つきが大きく、遠くにお移しても心配せずともよく、まだ乳

母も定まっていなかったもので、老宮人とわたくしの阿只(ばあや)をいっしょにやってお世話をさせた。まもなくして、景慕宮が紅疹をわずらい、おなおりになったところに、今度はわたくしがかかり、元孫もおかかりになった。わたくしは出産の後でもあり、大きな病気に注意していたものの、このように大病にかかり、その症状は決して軽くはなかった。元孫がまた紅斑を生じて、順調に回復はなされたのだが、わたくしが大病の中、心配させてはいけなと考えて、宣禧宮とお父さまはわたくしには知らせず、わたくしもまた知らないままに過ごした。景慕宮は紅疹の後にも余熱がはなはだしく、お父さまは景慕宮をお見舞いした上で、わたくしの看護をし、また元孫の看護もしなくてはならなかったから、三か所を昼夜に往き来して、そのときの心配と気苦労とで、髭と髪とがすっかり白くおなりであった。

和協翁主はその疫病によってお亡くなりになった。景慕宮はその妹御の境遇がご自分と似通っていることが気の毒で、親密なお気持ちを特別におもちであったが、翁主のご病気の様子を掖庭の奴隷が道にならんでいるのに尋ねて、お亡くなりになったことを知って、悲しみにたえることがおできにならなかった。このようなことから見ても、宮の本然の性質の善良であることをよく知ることができようというものだ。

その年の十二月、台諫<sup>44)</sup>の洪準海が上疏したことによって、英廟はたいへんに激怒なさり、景慕宮を宣化門<sup>45)</sup>に平伏させなされて、きびしいご命令を数多くお下しになった。景慕宮は大病の後で、あたかも雪寒のきびしいおりに、その降りしきる雪の中で罪をお受けになったが、打つ伏した身体に雪が積もって、打つ伏されたところがどこかわからないほどで、身体をわずかにでもお動かしになることもなかった。仁元王后が、

「お立ちなさい」

とおっしゃったが、お聞きにならず、英廟の激しい怒りが鎮静した後に、やっとお立ちになったが、それを見ても、性質が沈重であることがわかるとうもの。その後も王さまの怒りは解けず、その月の十五日に彰義宮<sup>46)</sup>に行かれて、仁元王后に、

「伝位<sup>47)</sup>したいと思うのですが」

とおっしゃった。しかし、仁元王后は耳が遠くて、よく聞こえず、

「なるほど、なるほど」

とお答えになったので、英祖は、

「王母のお許しを得たいのです」

とおっしゃると、

「伝位なさるがよい」

とおっしゃった。そのとき、東宮が蒼ざめ、茫然となさること、いかほどであったろうか。春坊官<sup>48</sup>)を呼んで、上疏を書かせなさるとき、少しもお泣きやみになることがなかったということで、春坊官が部屋から出て来て、深くため息をついたことであつた。英廟は彰義宮にながくとどまって、還宮なさらなかつたが、仁元王后は、

「耳が聞こえず、受け答えがよくできないことは、宗社のために罪を得ることで  
す」

とおっしゃって、小室にお下がりになっていた。それを、英廟はお手紙なさって、還宮をお願いになり、東宮は時敏堂の遜志閣の庭の水の上に藁をしいて待罪なさつていたが、彰義宮まで歩いて行かれ、また藁の上で待罪なさつた。頭を石にぶつけて、網巾が裂けて破れ、額が傷つき、血が流れ落ちたが、こうして聖体をみずから傷つけなされたのも天性の孝心と忠誠とから出たもので、むりやりに取り繕ったものではなかつた。そのような差し迫つた局面で、その上、お叱りがいかほどであっても、恭順に道理をお尽くしになつたし、また、変事に処するのに適切であつたから、かえって、令名をおあげになることにもなつた。そのとき、

「二品以上を遠方に流せ」

とおっしゃって、わたくしのお父さまもその中に含まれていらつしたがつが、直接の命令が下らなかつたので、ソウルの門外に待機して東宮のことをご心配し、うろたえて、あれこれと議論なされたお手紙が何通あつたことか。それらはすべて取つて置いたが、英廟は元孫が成長なされた後に、ご覧になって、至極の忠誠をご感心なさり、

「取つて置こう」

とおっしゃって、みずからもつて行かれた。

数日後、大朝は還宮なさつて、諸臣のうち再任なされた者を朝参させなされた。お父さまも帰つて来られ、景慕宮の傷ついた頭を拝見して、撫でて、お泣きになつて、そのあいださまざまなおことばをおかけになつたことが、今でも目の前に浮かぶようである。その病患が現われないときには、景慕宮は仁孝の心に富み、お悟りもよく、立派に振る舞われたが、病患が現われれば、まるで別人のようであつた。

どうして、それが異常であり、かつ悲しいことではなかったろうか。いつも経文や雑説の類をお読みになって、

「『玉枢経』<sup>49)</sup>を読んで習得すれば、鬼神をあやつれるという。読んでみよう」とおっしゃって、晩になれば、読んで、お勉強なされた。しばらくして、深夜に精神がぼんやりしたところに、

「電声普化天尊が見えた」

といっちは、怖がられたが、病患がしだいに重くなって行くご様子を見るにつけても、悲しく、痛ましいことであった。十余歳でご病気になられてからというもの、お食事を召し上がる様子からその一挙手一投足まで、すべて普通ではいらっしやらなかったが、『玉枢経』をお読みになって以後は、気質があまりにも変化したようであって、恐怖なされて、「玉枢」の二字をお避けになるようになった。端午の節句にも玉枢丹<sup>50)</sup>をこわがって、お用にならず、その上、天を恐れて、雷、霹靂、霹、そうした文字を見ないようになされた。それ以前にも雷がお嫌いではあったものの、それほどはなはだしくはなかったのに、『玉枢経』を読まれてからというもの、雷が鳴れば、耳をふさいで、うつぶせになり、すっかり止んでからでないとお立ち上がりにならなかった。このようなことを父王と母嬪はご存じになって、仰天なさるご様子は形容のしようもないほどであった。

壬申の年(1752)の冬にそうした症状が現われて、癸酉の年(1753)には驚悸症<sup>51)</sup>までもない、甲戌の年(1754)にも、その症状がしばしば現われて、やがてそれが痼疾となってしまったが、それも『玉枢経』が仇となったのだった。そのようなおりに、どうしたものか、良嬪という者を壬酉の年(1753)からお近づきになって、子をはらませなされた。大朝のお怒りを聞いておじけづかれたのか、ぜひとも流産させようとなされたものの、怪異なことが世間に現われ、禍根となるのを考えて、そのままにして置かれたので、甲戌の年(1754)の二月に禍が誕生した。英廟はなにもないおりにもお叱りになることが多かったが、禍の誕生には何度もきびしい叱責が重なって、景慕宮は日々おびえ、萎縮して過ごされた。

お父さまは景慕宮がいつもきびしい叱責をお受けになるのをお気の毒にお思いになり、上に下に、王さまのお怒りを収めようと尽くされた。わたくしは宮中では妬忌の心を起こすことなく、本性として他の方と競う気持ちをもたず、はじめから、宣禧宮は、

「そうしたことを気につけないように」

と戒めていらっしやったこともあり、また、景慕宮は禰の母親を寵愛なさるといふうでもなかったから、嫉妬する理由もないのであった。良嬪の臨月が近づいても、どう処置なさるわけでもなく、そのままに放って置かれた。景慕宮はこのことで、子どもが生れて英廟からいっそうお叱りを受けるのをおびえて、お世話なさる余裕がなく、宣禧宮もご存じなかったことで、わたくしが立ち回らなければむずかしい事態になっていたために、どんな知識があるというわけではなかったが、力の及ぶかぎりお世話した。それを知って、英廟はわたくしに、

「夫の意のままになって、他の女たちがみなする嫉妬というものを、あなたはしないのか」

と、たいそうお叱りになった。甲子の年(1744)の入内以後、初めてお叱りを受けて、恐縮して過ごしたが、おかしなことに、昔から、嫉妬が七去の罪<sup>52)</sup>の一つであり、婦女の妬忌しないことを最上の徳としているのに、わたくしはかえって妬忌しないことをとがめられてしまった。これもわたくしの運数であったのだろう。父子のあいだがふつうの状態であれば、英廟と宣禧宮は孫子が生れたのだから、すこしはご容赦があつてしかるべきであったが、それも望めない。景慕宮はこのとき惑乱なさっていて、わたくしがたとえ広い心をもっているにしたところで、婦女の心でもって、他の女子に子どもができて、どうして安然としていることができたろう。英廟と宣禧宮とはご存じではなかったが、景慕宮はおびえていらっしやるだけで、どうしていいかわからず、わたくしもまた側にいて妬忌に身を焦がしているわけにもいかず、景慕宮はそうでなくともおびえなさっているのに、病が何倍にも募ってしまうのではないかと心配しないではいられなかったのだ。

その年の七月十四日にはわたくしに清衍が生れて、英廟は、

「この百余年で初めて郡主<sup>53)</sup>が生れた。まことに尊いことだ」

とおっしゃって、お喜びになったが、乙亥の年(1755)の正月には、禰の弟の禎が生れて、それからは、良嬪のことについて、英廟がきびしくお叱りになることは少なくなった。

景慕宮のご病気の症状は紙に水が染み込むようで、王さまへのご機嫌伺いもまれにしかなさらず、講筵にも熱心にはお出にならず、心をわずらわれて、つねに呻吟なさっていて、廃人になられたかのようにであった。大朝が春坊官を呼んで、講学のことについてお尋ねになるのについては、ただただ恐れおののかれるだけであった。

この乙亥の年(1755)の二月に逆変が起こり<sup>54)</sup>、五月まで裁判を行って、逆賊たちを処刑するということがあった。百官が居並ぶ中に東宮を出て行かせ、裁判をご覧になるようにさせなされたので、東宮は毎日かならず出座なされた。それが人定<sup>55)</sup>の後、二更になり、三更、四更に及ぶときもあったが、一度として廃されることがなかった。終ると、

「東宮をこちらにお呼びしろ」

とおっしゃって、東宮がお行きになると、

「お食事はなされたか」

とお尋ねになって、ご返事なさるとすぐに、その日審判なされたことを聞いて、そして、それを消し去ろうとして耳をお洗いになった。実をいうと、好ましく、吉であることには関与させず、縁起の良くないことに関与させるようになさって、必要なことであれ、不必要なことであれ、日ごとにひとことでも別のことばをおっしゃるということとはなかった。ともあれ、東宮のお答えを聞いて、耳を洗ってそれを消し去るということを、一日も廃することなく、晩中かけてなされたのだった。いくら至極な孝行の心をもっていたところで、またいくら病のない人であったとしたところで、どうして倦まずにいられたらうか。そのご病気の症状を考えると、

「どうして、お呼びになったのか」

と、いつかんしゃくを起こしておっしゃってもおかしくはなかったが、その病によく耐えて、毎日、夜中であっても、お呼びになるときのことを考えて、待令していらっしゃったし、父王との応答をお間違えにならないようにお勤めになったことで、いっそうよく東宮の本然の孝行というものが理解できるはずであった。そのご病気の異常であったことは、妻子が悲しみ、宦官、内人たちが昼夜に恐れて過ごし、お母さまもくわしくお尋ねになって知るところであったが、父王はどうして子細にご存じであったらうか。上に対されるとときと臣下に対されるとときは普通のときと違わず、いつものようであったが、そのことがかえって息詰まるようで悲痛であって、上から春坊官に至るまで、ご病気にあきれはてて、容赦する道理がないほどに切迫したときには、お心の病であることを人みなが知るように、明らかにしてしまった方がいいと思ったものだった。

こうした逆獄のときであっても、父子のあいだには心配ごとが多かったが、憂鬱きまわりのないことをどうして記録までして置こうか。十一月の始めに宣禧宮がご病気になられ、景慕宮はお見舞いに集福軒にお行きになったが、英廟は和緩翁主の

いらっしやるどころと近いのを、なにか企んでいるのかと嫌疑して、大いに怒り、

「早く出て行け」

とおっしゃったので、あわてふためいて、高い窓を越えて、出て行かれた。その日、景慕宮はたいへんにお叱りを受け、楽善堂にいたまま、清輝門の中には入らず、『書伝』の太甲を誦もうとなさったが、お母さまのご病気のお見舞いをしようとして、すこしも自分では誤ったところはないのに、そのようなことになってしまい、そこはかとなく悲しく、恨めしくて、

「自殺してしまいたい」

とおっしゃって、やつのことで鎮静なされた。しかし、父子のあいだはぎくしゃくして、まったく回復しようのないものになってしまっていた。

丙子の年（1756）の正月、王さまみずからが尊号<sup>56</sup>をお受けになったとき、景慕宮は参礼させなせることがなかった。ご病気がますます篤くなって、講義もしどろもどろになられることが多く、就善堂<sup>57</sup>の外の焼厨房<sup>58</sup>の一つところに身動きもなさらず、じっとなされていたが、どんなにか心配で、また、焦燥しないでいることはできなかった。五月になって、英廟は崇文堂において引見することになさっておきながら、突然、楽善堂にまで会おうとしてやって来られたことがあった。景慕宮は整髪も洗面もしていらっしゃらず、またお着物の様子も端正でなく、乱れていらっしやったので、そのとき、禁酒を命じられていたおりのこととて、酒を飲んでおられないかとお疑いになって、

「酒を飲ませた者を捕まえて出せ」

と激怒して、景慕宮にだれが酒をさしあげたか、きびしく尋問なされたが、ほんとうにお酒を召し上がったわけではなかった。なんとも恨めしいことではある。英廟には、ちょっとしたことであれ、憶測を働かせて、どんなことでも口に出されると、そのことが頭を離れないということがおありであった。すべて天がそう仕向けたことであったのだろうか。

その日、景慕宮は庭に立たされて、酒を飲んだかどうか尋問をお受けになった。実際にはお飲みにならなかったにもかかわらず、あまりに恐ろしくて、また、あえて弁明なさないご性格でもあった。あまりに王さまが詰問なせるので、しかたなく、

「飲みました」

とおっしゃった。



「だれが与えたのか」

とおっしゃると、答えようもなく、

「外の焼厨房の大きい内人のフィジョンがくれました」

とおっしゃった。英廟はなぐりつけて、

「おまえは、この禁酒すべきときに酒を飲んで、気でも狂ったのか」

とはげしくお責めになった。乳母の崔尚宮が、

「酒を召し上がったろうというのは、ご推測に過ぎません。お酒の臭いがするかどうか、どうかお嗅ぎになってくださいませ」

と申し上げた。尚宮としては、酒などどこを探してもなく、召し上がったはずもないのを恨めしく思い、こらえきれずに、そう申し上げたのだった。しかしながら、景慕宮は王さまの前で尚宮を叱りつけ、

「飲んだか、飲まないか、わたしが飲んだと申し上げているのに、おまえがどうしてくちばしをさしはさむことがあるのか。下がっていよ」

とおっしゃった。ふだんは王さまの前ではもじもじしてあまりおしゃべりにならないのに、その日は無実にもかかわらずお叱りを受けながら、そのようにおっしゃったのだった。そのとき、恐ろしくて、おふるえになりながらも、そうおっしゃったことが、おおいに幸いなことに<sup>59)</sup>、英廟の激怒を誘うことになってしまい、

「おまえはわたしの前でその尚宮を叱りつけるのか。親の前では犬馬といえども、叱りつけるようなまねはしないものだ。そうではないか」

とおっしゃるので、お答えして、

「出しゃばって、弁明しようなどとするので、叱りつけたまでのことです」

とおっしゃった。顔をあらためて、下の者の道理で立派に振る舞われたことであった。

禁酒の命令のもとで東宮に酒をすすめたとしてフィジョンを遠くに流すことになった。また、景慕宮において大臣以下を引見なさることになって、まず春坊官がやって来たので、叱責しようとなさったが、その日は気持ちが届いて悲しく、天を衝くような壮気が散じてしまい、外見ではわからないものの、ご病気が現われて、やって来た春坊官に号令するように、

「おまえたちは、父子のあいだを和らげようともせず、わたしがこのような無実のことに当たっていても、ひとことも弁明しようもしない。なのに、今ごろ、このこやって来て、いったい、どういうつもりだ。みんな、出て行け」

とおっしゃった。春坊官のひとりだけはだれであったか記憶にないが、もうひとりには元仁孫で、彼はなにかを申し上げようとして、すぐには出て行かなかったところ、景慕宮はかんしゃくを起こして、

「早く出て行け」

と怒鳴って、追い出されたところ、座上の燭台が倒れて、楽善堂のオンドルの南窓に触れ、火の手が上がった。ところが、火を消しとめる者がいず、火勢は急であったので、景慕宮は春坊官を追うようにして、楽善堂から徳成閣に通じる門を通過して出て行かれた。一方で、春坊官は追われて出て行ったが、いつも崇文堂において引見なさる大殿への訪問者は建陽門を通過して入り、集賢門が閉まっていたために、時敏堂の前を通過して、徳成閣の書筵召侍をなさる建物を通過し、普化門を通過してまさに入侍しようとしていた。春坊官が出て行くと、やって来た訪問者が徳成閣を今しも通過しようとしていたが、景慕宮が声を高くはりあげて、

「おまえたちは父子のあいだをとりなしもせず、ただ禄だけ食んで、諫めることもせず、ただ宮廷でぼんやりしているだけだ。なんという役立たずめらだ」

とおっしゃって、みなを追い払われた。その言動はどれほど異常なこととみなの者の目にうつったことであつたらう。

そうしているうちにも、火の勢いはさらに盛んになって、元孫を觀熙閣という建物にお移したが、楽善堂と觀熙閣とはひとつづきで、二つの建物のあいだで不意に火災が起きて、わたくしはあわてふためいて元孫をお連れしたものの、そのとき、清躋を妊娠して五、六か月のころで、半間ほどもある石段をあわてて飛び下り、眠っている子を起こして、乳母に抱かせて景春殿に行かせた。觀熙閣は手の施しようもなく、救いようもないと思われたが、奇異なことには、觀熙閣は咫尺のあいだで火の手が及ばず、瓦も連なっていない養正閣に火が達したが、後に王となられる方がいらっしゃった觀熙閣が火の手を免れたことは不思議なことであつた。

思いがけず火災が起きて、英廟はご子息が腹立ち紛れに火をつけたのではないかと疑い、お怒りが十倍にもなって、涵仁亭<sup>60</sup>)に臣下を集めた上で、景慕宮を召し、

「おまえが放火の犯人だな。なぜ火をつけたのだ」

と詰問なさった。そのときも、悲しみに胸がふさがったまま、その火が燭台が倒れて付いた火であることをお申し上げにならず、また酒を召し上がっていらっしゃるかのように、いささかも弁明なさることがなかったから、おのずと放火なさったことになってしまい、切々と悲しくて、息がつかまるようであつた。その日、その場を

過ぎされた後、胸がふさがって、清心丸をのんで、癩を下し、

「どうしても、生きながらえようがない」

とおっしゃって、儲承殿の前庭の井戸に行って、身を投げようとなさったが、そのときの周りの者のおどろきとあわてふためきようはどのように形容できようか。やっとのことでお止めして、徳成閣にお連れしたことであった。

お父さまは、その年の二月に広州留守となって、お下りになることになり、遠方でのお勤めともなれば、景慕宮はまったく頼られるところがなくなることもあって、それで、

「対面したい」

とおっしゃったので、お父さまは参られたが、景慕宮はお父さまに過度のおことばとお気づかいを無数にお示しになった。そして、景慕宮は飲酒のこと、放火のこと、その二つの冤罪をお恨みになることをおっしゃり、

「おそらく、悲しみのあまり、生きるのはむずかしからう」

ともおっしゃったが、そのことばをお聞きするお心はどのようであったろう。

お父さまは王さまには、

「慈愛のお心をお忘れくださいますな」

と申し上げ、景慕宮には、

「よりいっそう孝行のお心に磨きをおかけになるように」

と、泣きながら申し上げた。景慕宮には目にあまるお振る舞いがあったとしても、お父さまが申し上げ、直接に教訓なされば、お心も落ち着くようで、あれこれと申し上げて、ようやくお気持ちも鎮まったようであった。

わたくしは秋にお母さまを失って、その悲しみはたとえようもないものであったが、景慕宮のご病気がしだいに思わしくなくなって、心配ごとが重なっていたために、その葬事の光景を呆然としながら見守っていたが、お父さまを拝見して、たがいに抱きあって泣き明かしたことが、今でも目の前に見るようである。五月の変のあとというもの、景慕宮はおのき恐れ、ご病氣も募り、心もさまようようにお過ごしで、目にあまる言動も多かった。講筵に出られることもまれになり、閑議のときには無理にでも気持ちを落ち着けて臨まれたが、どれほど意欲と興味をおもちのことであったろうか。のみならず、鬱積に耐えることができず、王さまが出ていかれば、後庭に行って、矢を射たり、馬に乗ったりして、旗幟兵器のたぐいをもって、内人を連れて遊びまわり、お付きの宦官たちが音楽まで奏するのだった。

その年の七月に仁元王后が七十におなりになったので、耆老科<sup>61)</sup>を実施なさり、後苑においてお祝いをなさったとき、なんとかして景慕宮にも参加をおさせになって、無事にお祝いの行事が終って、たいへんお喜びになったことから見ても、王さまには景慕宮をおだやかに撫恤するお気持ちがおありであったようで、すこしの辛抱だけでもなさったなら、どうしてあのような事態にまで立ち至ることがあったろうか。父子のお二方が自然におのれの心に背いて、あのようなことになってしまったが、みな天の意志というしかなく、ただひたすらに恨めしい。

陵行のお供を二十二歳になってもなさったことがなく、大人になれば行くことができるものと、期待していらっしゃったが、一度も行かれることはなく、そのことも悲しくて、胸に鬱々たる炎となっていた。丙子の年（1756）の八月一日に初めて明陵<sup>62)</sup>にお供なさることになって、お気持ちが晴れて、お喜びになり、沐浴なさって、幸いにも事故なく、行って帰って来られた。陵行のあいだに、仁元王后、貞聖王后の両聖母と宣禧宮とにお手紙をお書きになったが、わたくしにまでお手紙をくださって、その手跡を今でもたいせつに持っている。そうしたところはすこしもご病気でいらっしゃるようではなく、なにごともなくお帰りになったことを、大きな慶事のように思ったことであった。

陵行の後、しばらくのあいだは、大きなお叱りをお受けになることもなかったが、それは鄭氏の妻となられた和緩翁主が八月初めに女子を産んだので、王さまがお喜びで、ご機嫌がよかっただけのことであった。普通の人情として考えれば、妹だけがそのように寵愛されて、ご自身は志を得ることがなく、いったいどのようなお気持ちでいらっしゃったことだろう。そのときまで決して不孝なお心をもたれたことはなくて、妹の安産なさったことをただめでたいことだとお考えだった。初めて陵行のお供をなさることになったというのも、宣禧宮が、

「今だに陵行にお供をなさらないようでは、民心にもいかに奇異に思われることだろう」

といて、鄭妻に王さまに申し上げるようにしむけたようであった。

その年の閏九月に清璿が生れた。以前のように健康でいらっしゃれば、景慕宮はどんなにかお喜びになられたことであろう。ところが、やって来てご覧になることもなく、ご病気はいよいよ悪くなっていった。まもなく、お父さまが平安監司になって、すぐにもご出発になることになったが、危惧なさることが日に日に募って、ご出発の日には、心もとなく、気がかりのご様子であった。その年の十二月の

十日ごろ、景慕宮は徳成閣において痘症にかかり、斑を生じなされた。回復は順調であったものの、ぶつぶつがたくさんできて、心配であったが、幸いにも、成人になってからの痘症であったから、二十二歳の年齢で、たいへんな熱もおさまって、きれいにおなおりになった。まことに慶事の至りといってよかった。宣禧宮はやって来られて、近くにお泊りになり、昼夜となくご心配になった。元孫は恭黙閣に避寓させることにして、わたくしは狭い部屋で景慕宮を看護しようといっしょに過ごしたのだった。そのとき、寒気ははなはだしく、部屋の三面に白い蒸気が凍りつくほどであったが、その重い病状をようやくのことでやり過ごすことができた。ところが、それも宗社にとって無窮の慶びというわけではなかったろうか。王さまは一度たりともお見舞いにいらっしゃらず、お父さまは関西に遠く離れていらっしゃって、わたくしただひとり心が砕いたが、そのことをどうしてみな書けようか。痘症がすっかりおなおりになった後に、景慕宮は景春殿にやって来られ、そこで養生なされた。

丁丑の年(1757)の二月十三日、貞聖王後の宿患がにわかになりに重くおなりであった。手の爪がすっかり青くなって、吐かれた血がひと瓶にもなったが、その色も赤くはなく、黒く不思議なもので、若いころから積年たまったものが出たのだったか、そのおどろきは並大抵のことではなかった。わたくしがまず参り、景慕宮にはすぐに後を追って来られたが、吐血なされたのが気がかりのご様子で、お吐きになった器をつかんで、涙をお流しになったが、それを拝見して感動しないものはだれひとりとしていなかった。王さまにはまだご存じなく、血の入った器を持って、中宮殿の長房にみずから行き、医官に見せようとなされたのだった。たとえ至極なる慈愛をお受けになったとしても、実母とは異なり、間隔がおありのはずなのに、天性として孝行で、善良でいらっしゃったから、自然にそうなされたのだったが、そんなご様子を拝見すれば、いったいだれがご病気であると悟ったであろうか。

夜に入って、貞聖王后のご病気も一息ついて、遅くまでいらっしゃるのを知って、

「これぐらいにして、お帰りなさい」

とおっしゃったので、三更のころ、心ならずも景春殿にしばらく下がっていらっしゃったところ、暁になって、内人がやって来て、

「貞聖王后には深い眠りに陥られて、なにをいっても、お答えがない」

と申し上げた。景慕宮はおどろいて、飛んで行かれたが、深くお眠りのようで、な

にを申し上げたところで、お答えにならないので、千万べんも

「わたくしが参りました。わたくしが参りました」

とお呼びになったが、おわかりにならないようなので、取り乱して、泣いていらっしやっただ。そのご様子を、すべて書くことはできない。夜が明け、十四日になって、王さまがいらっしやっただ。兩殿のあいだはきわめて親密というわけではなかったが、病が重く今にも危ないということで、いらっしやっただのだった。景慕宮は父王をご覧になって、また恐縮なさって、お泣きになることもなく、ただ窮屈そうになさって、頭をおあげにもならなかった。そのご病気の身で、周囲をおもんばかりながら、息をこらして泣いていらっしやっただご様子に、お側にいるものたちすべてが感動して、涙を流して泣いた。あまりにも父王が恐しく、手がふるえて、人参茶を続けてこぼされた。看病なさっていたご病気の症状をご報告なさると、大王がご覧になるのに、すこし身を乗り出されると、倉皇として、狭苦しい部屋の片隅に身をすくめていらっしやっただ。王さまは景慕宮が先刻まで泣いて悲しんでいらっしやっただことをどうしてご存じだろう。景慕宮がご自分のお着物や、立居振る舞いなどの心配をなさるのを、

「内殿のご病気がこのようなときに、わが身のことがどうして気になるのか」

とお叱りになったが、天地のあいだに起こりもしないような、そのような誤解が、先刻までのご立派な振る舞いをすべて覆い隠してしまったのだった。

「先ほどは、あれこれと立派になさっていたのですよ」

と申し上げることもできなかったから、王さまは景慕宮を不孝かつ無情な奴だとお決めつけになった。そのときの宣禧宮の気苦労とわたくしの心の焦燥をなにとたえようか。

このときちょうど、たくんだかのように、日城尉<sup>63</sup>の病も重く、翁主をやつて、英廟は気持ちが悪く落ち着かず、ご心配のご様子といったら、くらべるものとなかつた。王后のご病気はいよいよ危急を告げ、十五日の申の時にお亡くなりになったが、まことにお気の毒なことといったらなかつた。東宮は観理閣の下の部屋に下がつて、喪をお発しになることになり、わたくしもまた喪を發するとともに、招魂を行つた。王さまは多くの内人たちと、王后とともにこの長年月に経験なさつたこと、そして、このときこのようにお別れになった悲しみを長々とお話しになっていた。日が暮れ、東宮は胸をたたいて、はなはだしくお悲しみであつたが、時刻を違えずに、喪を發して、挙哀なさることもなく、ただうろたえていらっしやっただとこ

ろに、日城尉の訃報がとどいたのだった。

王さまはそのとき悲嘆にくれ、即刻お出ましになったが、申の時に生命を落とされて、日暮れのころには喪を発しなされた。そのあわたましいことといったらなかつた。

十六日には襲<sup>64</sup>を行って、大朝の還宮を待って、殮<sup>65</sup>を行った。東宮は天に叫び、身悶えなさることが過ぎて、ときおり奉審<sup>66</sup>して泣き叫び、お泣きになる涙のとどまることがなかつたが、ほんとうの母子のあいだであっても、これ以上のお悲しみがあつたらうか。そのお悲しみになっているご様子を、もし王さまがご覧になっていたならば、あるいは感動なさらないでもなかつたらうに、還宮なさった後でお会いになると、また萎縮したご様子で、うつむいていらつしやり、終始、啼泣なさる様をご覧になることもなく、じれったい態度で、今までとすこしも変わることがなかつた。

貞聖王后はふだんは大造殿の大きな部屋にいらつしやつたが、お休みのときや、また、お風邪でも召されると、コンノンバン<sup>67</sup>に来て過ごされた。お病気が重くなって、

「大造殿がどうしてたいせつであろうか。わたしはこの部屋で生命を終えたい」とおっしゃって、西側にある観理閣<sup>68</sup>という建物ににわかにお移りになって、そこでお亡くなりになった。殮を行った後、ご遺体を景薰閣<sup>69</sup>にお祭りして、入梓宮<sup>70</sup>を行い、そこを殯殿<sup>71</sup>とした。玉華堂<sup>72</sup>という建物に東宮の居廬<sup>73</sup>をつくって、そこで五か月のあいだ居廬を行われて、朝夕の奠<sup>74</sup>と朝夕の上食<sup>75</sup>の後、昼茶礼<sup>76</sup>も続けてお勤めになったが、どんな日にも六時の哭泣<sup>77</sup>を欠かされることはなかつた。わたくしはといえば、その間、観理閣には向かい合わせの隆慶軒にいたのだった。

仁元王后は七十を越えて、はなはだしく衰え、貞聖王后の国喪の後の悲しみの中にあつても、まるで雲霞の中にいらつしやるようで、悲しむ術もご存じないようであつた。ところが、その月の晦日にご病気が重くなって、大王大妃殿の長房<sup>78</sup>に避寓していらつしやつたが、三月二十六日にお亡くなりになった。限りない悲しみの上に、英廟は望七の衰境<sup>79</sup>になって大きな悲しみに遭われ、その哀痛のはなはだしい様がいつそう無惨であつた。仁元王后の聖徳は卓越していらつしやつて、宮中の法度も仁元王后の啓示によって至厳であつたが、また、東宮への愛情も至極でいらつしや、わたくしを格別に愛してくださつた、その恩恵をどうしてみな書き

記せよう。東宮を愛されるのに情を尽くされて、お食事をみずからの手で特別につくって差し上げられたが、宮中のお食事の中でも仁元王後の御殿でのお食事は格別のご馳走であった。

しだいに王さまと東宮とのあいだの雲行きが怪しくなっているという話しをお聞きになって、仁元王後はたいへんご心配になり、わたくしを見れば、こっそりと、

「どんなにか心配なことでしょう」

とおっしゃって、なぐさめてくださった。そして、東宮が喪服をお召しになっているご様子を見るにしのびず、

「あのようにしていられませんが、そうでなくとも、悲しいのに」

とおっしゃって、たいへんご心配であった。しかし、きまりには厳しくて、翁主たちがあえて嬪宮と肩を並べることがないように、たとえ狭い部屋のことであっても忘れないようになされた。あるとき、その門の中には和順翁主もおられたはずだが、ご病気でいられず、和柔翁主だけがわたくしとともにいられ、狭い部屋に座っていたので、わたくしの肩が並ぼうとしたとき、

「嬪宮の身分で失礼でしょう。わたしがあえてそうしようか」

とおっしゃって、お怒りになったことがあった。そのご病気が重くなったときも、その礼貌の厳かであることには感嘆したものだ。

貞聖王后はそのご子息のためを思うお心から、王さまが東宮に辛くお当たりになるのを痛恨のことと思われ、東宮のおかしな挙動のことをお聞きになると、国家の行く末もご心配になり、宣禧宮といつも行き来なさっては、まごころから憂慮なさった。

月を続けて、おふたりの聖母がお亡くなりになって、宮中ががらんとし、厳かだったきまりもいつのまにか崩れて行き、寒々として、行き場を失ったようであった。

景慕宮はその祖母のご慈愛を大いに受けていられ、そのお悲しみも特別であった。それにつけても、父子のあいだだけでも普通であったなら、どんなにかよかったことだろう。

永慕堂において襲殮して、ご遺体を景福殿にお移して、殯殿には通明殿を使って、晦日に入梓宮をなさったが、その日、白木の板の上に素布をおおい、いつも王后が後苑に出入りなされるとき使われた耀西門を通して、王后にお仕えした内人たち



が靈輿をかついで出た。その威儀はあたかも大礼を執り行うときのようにであったが、わたくしはといえば、悲しくていささかも見上げることができなかった。

王さまの居廬庁は体元閣<sup>80)</sup>に置かれた。英祖は王后のご病気のときから心配で、昼夜お側を離れることなく、まごころからご看病なさったが、お亡くなりになって後も、因山の前の五か月のあいだ、朝奠も、六時の哭泣も、一度としてお欠かしにならなかった。六十四のお歳でありながら、そのような誠心と精力がどうしておありであったのだろう。ご自身はこのようにまごころをお尽くしになったが、ご子息のなさったほんとうのところはご存じなく、悪く、誤ったところだけがお耳に伝わった。お二人の聖母がいらっしゃらなくなって、宮中の様子を申し上げる者もいなくなって、いよいよ事柄があいまいになってしまった。たいいてい、父子のあいだがうまいかないのにはなにか曲折があるものだが、これはいうまでもなく、辛未の年(1751)の十一月に賢嬪宮<sup>81)</sup>の喪事があってからのことが大きい。英廟は孝婦を失って、お悲しみになり、喪葬にもみずから赴かれ、まごころをお尽くしになって、心づかいの及ばないところはないほどであった。そのようになさっているあいだ、そこにたまたま侍女の内人がいたのだが、それがいわゆる文女であった。喪事の後、この女をお近づけになり、女は受胎してしまったが、その兄というのが文性国という者で、この者を別監<sup>82)</sup>として重用なさるようになって、文女への寵愛はひとかたではなかった。癸酉の年(1753)の三月に翁主を産んだが、そのとき、人びとは騒ぎたて、

「そもそも、この兄妹というのは、御子を産まず、別の男の子を産んでおいて、御子などと吹聴するような輩だ」

と、狼藉なことをいったり、

「文女の母親というのが、尼の還俗した者で、娘の出産に戻って来た」といったりしたのであった。

文性国自身はどのような心積りで東宮に対してよこしまな気持ちを抱いたのか、まったくもって邪悪などもがらであった。別監から司鑰に昇進して、妹はといえば、辛未の年(1751)の冬から王さまのお情を受けるようになって、この兄妹への寵愛は極みに達した。英廟が若いときにいらっしゃった建物というのは建極堂<sup>83)</sup>であったが、それを孝章世子にお与えになり、賢嬪がそこにとどまって、辛未の年の喪事というのも、そこで行われた。その下の古書軒という建物に文女を置いて、文女はそこで出産したのだったが、甲戌の年(1754)には、また女子を産んだ。後

苑の中庭の門の外に文女付きの宦官としてチョンソンへ置かれて、性国もその宦官のいるところを通してやって来たが、両宮のあいだのうまくいっていないことをその者は知っており、その隙に乗じて、聖意におもねろうと、景慕宮のなさることを逐一知って、王さまに告げようとした。景慕宮のなさったことを、だれがあいだでいうことであっても、性国はおのが勢力を頼んで、恐れることもなく、東宮のお付きの者たちというのみな自分の同類であったから、東宮のほんの微細なことまで、わかったことすべてを王さまに申し上げた。文女は中で聞いたことはどんなことであれ、みな申し上げて、ご存じないことも、わざとお疑いになるように、日に日に東宮の欠点だけをあげつらって、申し上げた。王さまがますます不安になられ、国運がまことに不幸というしかなく、このような妖女と姦賊が跋扈するようになったのは、実に嘆かわしいことであった。

王さまはこの兄妹の申し上げることであれば、お疑いになることもなく、了解なさった。どのような曲折があつてのことであつたか、丙子の年(1756)に使っていた内人がいなくなったので、世子宮と嬪宮の司鑰<sup>84)</sup>と別監の娘を内人として選んで入れようとしたことがあつた。これは景慕宮のお考えになつたことではなく、わたくしの一存で代りの内人を入れようとしたのであつたが、司鑰金ヌランの娘をつかまえ、別監の子息もつかまえて、朝に決めたことを、昼にはどう伝わつたのか、もうご存じで、景慕宮を呼びつけて、

「おまえはどうしてわたしに相談することもなく、内人を決めたのだ」

と、たいへんお怒りようで、そのときの驚きといつたらなかつた。金ヌランというのは性国とは親しく付き合っていて、自分の子どもをこちらには入れたくはないと考えたらしく、大王がそのようにすばやくご存じになつたというのは、性国が申し上げたのだということがはっきりしていよう。

丙子の年(1756)の痘症はまもなくおさまつたものの、お二人の喪事にお遭いになるといふ悲しみもあつて、お心を碎かれることが多く、景慕宮のご病氣はしだいに篤くなって、おかしい挙動がひんばんに現われるようになったが、性国は耳にすることごとに大王に逐一報告したので、お二方のあいだはいよいよ怪しくなつていった。五か月のあいだは仁元王後の殯で、王さまは景薰閣に哭しに行かれたが、景慕宮のいらつしやる玉華堂に立ち寄られて、どんなことであれ、お耳にとまつたことがあれば、お叱りになり、景慕宮が通明殿に行かれると、またお叱りを受けて、かんしゃくが火のように起こるのだった。人びとが集まっているとき、内人た

ちが多くいるときなど、委細かまわず、過ちをあらわにするふうであって、通明殿の仁元王後の内人がたくさんいるところで、六、七月の極熱の中、あれこれと東宮をお叱りになったが、そのまま景慕宮の発作とご病気が募って行って、宦官を鞭打ちなさるようなことも、そのころから多くなって行った。初喪のときに立派に悲しく振る舞われたことにくらべれば、喪中に鞭をふるうなどということは信じられないことで、丁丑の年(1757)ごろからはお着物もだらしくなったが、そのことなどをどうして言い尽くせよう。

景慕宮は五か月の殯のあいだ至極むずかしい局面をお過ごしになり、六月に、貞聖王後の因山のときとなつて、悲しみは初喪のときと変わらずに、ソウル城外にまで出て行かれて、大輿を哭送するとき、号泣して悲しみなされたのを拝見して、百官軍民のすべてが感泣したことであった。ほんとうのお気持ちが現われるときには、そのように振る舞われたのだが、そうしたお気持ちが父王には伝わらなかった。哭送して帰って来られたときに、それを迎哭<sup>85)</sup>しようと思われたところで、どんな事故があったのか、理由はいっさい考慮なさらず、そのとき、日照りがあって、怒りっぽくなっていらっしゃったせいか、きびしい命令をお下しになった。その晩、徳成閣の庭で徽寧殿<sup>86)</sup>を仰ぎながら、景慕宮が号哭なさって、死ななばかりであったことをどうしてみな書き記すことができようか。

その六月から病が高じて、人を殺すことをお始めになった。そのとき、当番の宦官であった金ハンチェという者をまず殺し、その首をもって、入って来て、内人たちにお見せになった。わたくしはそのとき人の首を切ったものを初めて見たが、まがまがしくて、おどろいたことといえば、これ以上のものはなかった。人を殺しても、心は少しもお晴れにならないようで、そのとき、内人の何人かも殺されて、その恐ろしさといったらなく、いたしかたなく、宣禧宮に、

「病気が高じて、このようなことになりましたが、どうしたものでしょうか」と申し上げたところ、宣禧宮はおどろいて、食事もお喉を通らず、気を失ってしまわれた。気がついて、呆然として、

「いったいだれがこんなばかげたことをいうのか」

と尋ねて、人と会ってのあいさつも忘れたままでいらっしゃった。そして、ご自身の身体に火が付いたかのように、急に泣き出して、

「あまりにお気の毒で、今までは王さまには知っていることも知らないとお申し上げていたが、そのようなお振る舞いがあったは、どうしたのか」

とおっしゃって、やっとのことで鎮静なさった。そのとき、しだいに手の施しようもなくなった、無惨きわまりのない状況を、どう形容すればふさわしいか、知らない。

七月に仁元王後の因山が行われた。そのとき、大雨が降ったが、王さまには陵までお行きになって帰って来られ、至極の孝行を尽くしてお仕えになった。景慕宮は孝行のお気持ちがないというわけではなかったものの、ご病気がいよいよ高じて、人を殺すご趣味が生れたために、人々は恐れおののいて、お殺しにならないようにご忠告したが、そうした事態がどうして生じたのであろうか。お父さまは関西から五月にはお帰りになったが、王さまのお顔を拝見して喜んで、あらためて哀痛なさり、景慕宮にもお会いになって、この間、大きな病いにおかかりになって、また二つの喪事にもお遭いになったことを思っ、そのご病気が心配でもあり、憂慮して、父娘がたがいに抱きあって、悲しんだ。

その年の九月には、景慕宮は仁元王後の針房<sup>87)</sup>の内人であったピンエとお通じになった。その内人というのは後に恩全君嬪を産んだが、何年ものあいだ気にはかけておられたものの、発作がしだいに現われて、ちぎりを結ぶ機会のないままに放って置かれたのであった。仁元王后がいらっしゃらなくなって、これからどう連絡をとるのかと考えて、連れて来られたものの、その者は奢侈を好んで、部屋を飾り立て、家具調度のたぐいでそろえないものはなかった。その間、景慕宮は内人たちを何人もお近づけになって、従順でなければなぐりつけて、血肉が淋漓たる中でも、思いをおかなえになったが、だれがそんなことを好んだらう。

お召しになった女子の数が多く、一時にそうなさって、それもたいしたこととは思っていらっしゃらないふうで、子までなしたかなりの身分の者であっても、すこしも仮借なさらず、手荒にお扱いになったが、ピンエに対してだけはするように大事に扱われた。ところが、その人物というのがまったくもって邪悪であって、東宮にいったいどれほどの財力があると思っていたのだろうか。

そのとき、内需司<sup>88)</sup>の立ち働きにはどれほど気苦労があったことだらう。内需司の官員以下がそうした事実を申し上げなければ、王さまはご存じないことであったが、しかし、あの性国がどうして申し上げないでいたであらう。九月に景慕宮がピンエを連れて来られて、十二月に王さまはご存じになったが、その日はあたかも冬至の日で、王さまは大怒、大怒といったありさまで、東宮を呼びつけて、

「おまえは、どうしてそのようなことをするのか」

と、はっきりした罪状がなくても、厳しい叱責はとどまることを知らなかった。  
王さまは

「その内人を引きずり出せ」

とおっしゃった。そのときの景慕宮のありさまはといえば、うろたえて、必死になって、ピンエを出すまいとなさったが、王さまは、重ねて、

「早く捕まえてこい」

と催促なさった。景慕宮は承知なさらず、死生をかけても引き渡すまいとなさって、事態はいよいよ深刻になったが、そのピンエの顔を王さまはご存じないのをもっけの幸いに、針房の内人の同じ年頃の者を、

「ピンエという者です」

といて、お引き渡しになった。

わたくしは甲子の年(1744)の興入れから、王さまの愛恤なことが格別で、その息子に対して穏やかなお気持ちでないときには、その妻子もいっしょに嫌われるのが普通であるのに、わたくしを愛してくださって、またわたくしの産んだ子どもたちもかわいがってくださいしたのは、そのお嫌いな息子の妻子ではないかのようであった。そのことについてはいつも天恩を感謝しながらも、またなにかと不安の種でもあったが、その気持ちを書き記すのはむずかしい。このとき、岳父として仕えて十四年で、わたくしは初めてきびしく叱られたが、叱られた理由というのは、

「世子がピンエを連れ込んだとき、あなたはそれを知っていて、わたしに告げなかったが、あなたまでわたしをだますという法がどこにあるか。あなたは夫の情を引き留めようと、妾が現われてもすこしも嫉妬することがなく、その子どもまでできてしまった。こんな人情に外れたことを知って、わたしの心がどうして穏やかでいられよう。仁元王後の内人をむりやり連れ込んで、あのようなことまでしたのに、あなたはわたしに知らせない。わたしは今日の今日知って、尋ねても、すぐには答えてもくれない。あなたの振る舞いがこのようだと夢にも思わなかった」

と、地団太踏んでお叱りになったが、お叱りを受けて恐縮して、

「どうして夫のすることをとやかに申せましょうか。わたくしの道理として、そのようなことはできなかったのです」

と申し上げると、いっそうお叱りになった。それまで、この身にあまりご慈愛をお受けしていたのに、初めてきびしい叱責を受けて、恐縮至極であった。

そのようなときに、その内人を隠して、また別の内人を、鄭妻が嫁ぎ先に行っていないようになっていた建物に連れ込んで、

「匿まって置け」

とおっしゃった。その晩、父王は居廬していらっしゃる恭黙閣に東宮を呼んで、またまたお叱りになったので、東宮は悲しくて、その途中、養正閣の井戸に身を投げようとなさったが、そのような痛ましい光景がいったいどこにあるか。たまたま宿直していた朴セグンという者が背負って助け出したが、井戸端には氷が張っていて、たまたま水も少なく、無事に助け上げはしたものの、胸をつまらせ、怪我もなさっていて、おなぐさめすることばもなかった。父王は、さらに気分を害されるような、井戸に身を投げるという奇怪な行動に出られたのをご覧になって、どうしてお怒りにならないわけがあったろうか。そのとき、大臣以下みなが出仕していて、その光景を目にしたが、そのときの首相というのは尚魯という陰険な人物であった、東宮にお会いするときには意を迎えるようなふりをして、王さまには精一杯おもねって、見るからによこしまな輩であった。

お父さまは景慕宮が叱責をお受けになったことと井戸に身をお投げになったことを見て、忠愛憂悶の心に耐えかねて、ご自分の立場をかえりみることなく、

「ことわざに、君に容れられなければ、身体が熱い、などと申します。君臣のあいだでもそうであるのに、まして、父子のあいだは天性ではありませんか。景慕宮は王さまのご慈愛をお失いになって、煩悶して、あのようなことをなされましたが、その曲折をお考えになるよう、千万べんもお願いいたします」

と申し上げた。すると、千古にまれなほどの君臣のあいだがらで、ご機嫌を損じることなどそれまで一度としてなかったのに、その日、王さまはお父さまが申しあげたことばに激怒なさって、わたくしにも苛立っていらっしゃったために、わたくしの罪をも加えて、官職を削奪して、たいへんきびしく叱責なさった。お父さまは恐縮して退出されたが、ソウル城外で月決まりの齋戒でもするようでした。

王さまと東宮とのあいだのいざごはそのようで、百姓たちもお父さまだけを頼りにしていたのに、人心が揺乱して、どうなることか想像もできず、わたくしもきびしい叱責を初めていただき、恐れおののいて、下室に下がっていたが、しばらくして、お父さまをふたたび登用なさって、わたくしも召し出して、慈愛は以前とすこしも変わらなかった。千万回も恐縮して、至極であった聖恩は、身を摩し、骨を

粉にしたところで、どうしてお返しできようか。

〔歳 辛丑 (1781) 元月 初五日 壺洞 大房 書〕

〔訳注〕

- 1) 正祖。著者と思悼世子とのあいだの子。
- 2) 英祖のこと。この巻では廟号を用いることが多い。
- 3) 承政院において記録した日記。承政院は王命の出納に当たる官庁。この日記をもとに、王朝の歴史書が編纂され、膨大な『朝鮮王朝実録』として残っている。ここに書かれている事実は、英祖五十二年の二月四日、王世孫と正祖が上疏して、承政院日記の処分を請い、英祖もまた了承して、思悼世子にまつわる壬午の年のことを削除させたこと。
- 4) 純祖のこと。すなわち、正祖の子、著者の孫。
- 5) 純祖元年 (1801) の四月から五月にかけて、思悼世子の後宮であった肅嬪林氏所生の禍と惠慶宮洪氏の叔弟の洪楽仁がキリスト教の信者であるとして、罪せられて、処刑されたこと。惠慶宮はこのことに心を痛めて、この文を執筆し始めたとする。
- 6) 正祖の後宮の綏嬪の称号。純祖の母。潘南朴氏の朴準源の女子。
- 7) 英祖の長男の孝章世子が亡くなった。
- 8) 中国の太古の伝説的人物で、八卦と書契を作ったとされる。
- 9) 昌慶宮の中にあった建物。英祖十一年一月二十一日、景慕宮はここで誕生した。
- 10) 昌慶宮の中にあった建物。
- 11) 参贊官以下を召集して、王みずからが文章を講ずること。
- 12) 毎月二回、王世子が師傅以下すべての官員を集めて、経史その他の進講に対して復習すること。
- 13) 世子侍講院。
- 14) 世子翊衛司。
- 15) 景宗の継妃であった宣懿王妃魚氏。
- 16) 肅宗の後宮の一人で、景宗の母親であった張氏。仁顯王后との確執で有名。
- 17) 肅宗の継妃、一時、張禧嬪のたくらみで廢妃の憂き目に遭ったが、後になって復位した。
- 18) 英祖の三女。思悼世子とは同腹の妹。
- 19) 宣祖の娘婿であった錦陽君朴瀾の五世の孫の錦城尉朴明源。英祖の三女の和平翁主の夫。
- 20) 王世子が書を読むこと。
- 21) 四礼の一つの成年礼。ここでは、男子は髻を結って冠をつけ、女子も髻を結う。

- 22) ここでは、仁元王后、貞聖王后、宣禧宮。
- 23) 昌徳宮にあった坤殿、すなわち女性たちが住まう建物の正殿。
- 24) 昌慶苑の北側にあった殿閣。
- 25) 正堂の前、あるいは左右にある長い廊下。
- 26) 本来は太祖の旧邸であった。その後、宣祖の五男の定遠君の私宅になっていたのを、光海君がこれを奪って、百余の殿閣のある大宮を創建した。仁祖元年三月、この宮廷に行幸があつて、大妃の命令によって、仁祖の即位があつたことで有名。元來の名は慶徳宮であつたが、英祖三十六年に慶熙宮と改称した。その後、何度も火災にあつて廃されたが、「日韓併合」のとき、日本人によって学校が建てられた。
- 27) 国の祈禱を受け持つ盲人の占い師。
- 28) 毎月六回、議政堂上、台諫玉堂などが集まつて、重大で要緊の政務を上奏すること。
- 29) 十五歳になつて、男子は冠をかぶり、女子は髪を上げて、大人となる礼式。
- 30) 新郎新婦が初夜に寝所をともにすること。
- 31) 景宗元年辛丑（1721）から二年壬寅（1722）にかけて、王位継承問題をめぐつて引き起こされた禍獄。景宗即位後、王が多病で、子がないことを理由に、老論の金昌集、李健命などが建議して、王弟の延祜君吟を立て、世嗣として、政務の代理をさせたところ、柳鳳輝、趙泰喬、金一鏡などの少論の反対に遭つて、金昌集など老論の四大臣は追放され、まもなく反逆罪に当たるとして、逮捕され殺されてしまつたこと。いわゆる辛丑士禍、壬寅の獄。
- 32) 壬寅の獄は金一鏡の誣告によることがわかつて、金一鏡一派は殺され、あるいは追放された。その残党は大きな不平を抱きつつ、機会をうかがっていたが、英祖四年戊申（1728）になつて、李麟佐、鄭希亮などが反乱を起こしたこと。
- 33) 英祖の宮廷、あるいは英祖その人をさす。
- 34) 思悼世子の宮廷、あるいは王に代わつて政務を執る思悼世子その人。
- 35) 国に慶事があつたときに宮中で行う科挙。
- 36) 王が文廟において酌獻の礼を行うときに執り行われる文科の試験。
- 37) 弓術の上手な者を選抜すること。
- 38) 武科の一種。武官を閲見した後、堂上官以下の軍官と閑良などの武技を試験すること。
- 39) 死刑囚を審理すること。
- 40) 王みずからが陵に参られること。
- 41) きわめて朝鮮的な反語表現。本来「じりじりと待ち焦がれていた」とあるべきところ。
- 42) 昌慶宮の中の景春殿にあつた建物。



- 43) 先代の王。ここでは正祖大王。
- 44) 司憲府および司諫院の官職の総称。
- 45) 昌徳宮の中にあった一つの宮門で、熙政堂の前の門。
- 46) 英祖の潜邸であった、後の毓祥宮。
- 47) 王の位を移すこと。ここでは世子を廃すること。
- 48) 世子侍講院の官員。
- 49) 道教の經典の一つ。なにかを祈るときに古い師が呪文としてとなえるもの。
- 50) 五月五日の端午の節句に麝香、石雄黄、その他の薬材をつかって、さまざまな模様を作り、金箔を貼って、五色の糸でさし通して、禍いよけにしたもの。
- 51) 感動が大きいあまり、精神が異常をきたす病という。
- 52) 離婚の条件になる七去の悪。すなわち舅姑に順わない、子がない、淫乱、嫉妬、悪疾、おしゃべり、窃盗の七つ。
- 53) 王世子の正室から産まれた女子の封爵。
- 54) 英祖三十一年乙亥(1755)の尹志などの謀逆。
- 55) 日本と同じく一晩を五更に分けて、初更、二更、三更、四更、五更とするが、初更の三点に大鐘を撞いて、夜行を禁じた。それが人定であるが、春夏は午後八時ごろ、秋冬は午後七時ごろになる。
- 56) 英祖三十二年(1756)一月一日、「体天建極聖功神化」という尊号を受けた。
- 57) 昌慶宮の中の儲承殿の西にある建物。
- 58) 外にある台所。大がかりな食事をつくる内人たちの部屋。
- 59) これも41)と同じく朝鮮的な反語表現。「運悪く」というのが普通であろう。
- 60) 昌慶宮の中の明政殿の西側にある建物。
- 61) 六十歳以上の老人、すなわち耆老だけに受けさせる科挙。
- 62) 肅宗大王の陵。高陽にある。
- 63) 英祖の九女の和緩翁主の夫の鄭致達。
- 64) 死体を沐浴させ、新しい上着を着せること。
- 65) 死体を棺に入れること。
- 66) 王の意を受けて、宗廟や陵を見回ること。
- 67) 朝鮮式住宅において、居間と板の間をあいだにして向かい合っている部屋。
- 68) 昌徳宮の中の大造殿の西にある建物。
- 69) 大造殿の西北にある二層の建物。上層は澄光楼、下層は景薰閣。
- 70) 梓宮というのは王あるいは王後の棺のこと。
- 71) 陵におさめるまでのあいだ王および王後の棺を安置して置くこと。
- 72) 景薰閣の近くにあった建物。
- 73) 喪人が起居する廬幕。

- 74) 葬事の前、毎日、朝夕に遺体の前に酒果を供えること。
- 75) 朝夕に差し上げる食事。
- 76) 王あるいは王後の葬礼後、三年のあいだ魂殿、または山陵において行う祭式。
- 77) 六度、すなわち、暁、朝、真昼、夕方、宵の口、夜中に哭して泣くこと。
- 78) それぞれの官庁の書吏室をいう。
- 79) 六十一歳にさしかかった老境。
- 80) 昌慶宮の中の養和堂の南にある建物。
- 81) 英祖の長男の孝章世子の妻の趙氏。
- 82) 掖庭署の隷属で、座首の次の地位。
- 83) 昌慶宮の中の古書軒の西側にある建物。
- 84) 掖庭署の雑職の一つ。
- 85) 葬礼に当たった神主が帰って来るのを迎えて哭すること。
- 86) 貞聖王後の魂殿の号。
- 87) 針仕事を受け持つ内人。
- 88) 米、服地、奴婢などのことを管理する官庁。